



釘貫 亨 教授 近影

# 釘貫 亨 教授 略歴

一九五四年（昭和二九）年四月二九日生

## 学 歴

- 一九七九（昭和五四）年三月 京都教育大学教育学部国文学科卒業
- 一九七九（昭和五四）年四月 東北大学大学院文学研究科博士前期課程入学（国語学専攻）
- 一九八一（昭和五六）年三月 同修了
- 一九八一（昭和五六）年四月 東北大学大学院文学研究科博士後期課程進学（国語学専攻）
- 一九八二（昭和五七）年三月 同単位取得のうえ中途退学
- 一九九七（平成九）年二月 博士（文学）学位取得（名古屋大学）

## 職 歴

- 一九八二（昭和五七）年四月 富山大学人文学部講師（国語学）
- 一九八六（昭和六一）年四月 同助教授
- 一九九三（平成五）年一〇月 名古屋大学文学部助教授（国語学）
- 一九九七（平成九）年二月 同教授
- 二〇〇〇（平成一二）年四月 部局改組により、名古屋大学大学院文学研究科教授（日本語学）
- 二〇二〇（令和二）年三月 名古屋大学定年退職
- 二〇二〇（令和二）年四月 名古屋大学名誉教授

非常勤講師

椋山女学院大学短期大学部、南山大学文学部、東海学園短期大学、中京大学文学部、金城学院大学文学部同大学院文学研究科、名古屋女子大学大学院文学研究科、愛知大学文学部、神戸大学文学部、富山大学人文学部、愛知教育大学大学院教育学研究科、岡山大学文学部同大学院文学研究科、茨城大学人文学部、大阪大学文学部同大学院文学研究科、九州大学文学部同大学院人文科学府

学内および社会的活動

〔学内〕

名古屋大学二一世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」研究推進員  
名古屋大学グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解学的研究と教育」サブリーダー  
名古屋大学高等研究院運営推進委員  
名古屋大学博士課程教育リーダーディングプログラム「PhDプロフェッショナル登龍門」運営推進委員  
名古屋大学高等研究院院友

〔学外〕

国語学会編集委員  
国語学会常任査読委員、改組により日本語学会常任査読委員  
国語学会評議員、改組により日本語学会評議員  
日本語学会大会企画運営委員長  
日本語学会『日本語学大辞典』編集委員  
訓点語学会委員  
日本学術振興会科学研究費書面審査委員  
日本学術振興会審査委員会専門委員、国際事業委員会書面審査員（人文学領域）

賞罰 なし

著書

- 1 『古代日本語の形態変化』、和泉書院、一九九六年、単著、全三九四頁
- 2 『近世仮名遣い論の研究―五十音図と古代日本語音声の発見―』、名古屋大学出版会、二〇〇七年、単著、全二七八頁

- 3 『国語学』の形成と水脈』、ひつじ書房、二〇一三年、単著、全二七〇頁
- 4 『動詞派生と転成から見た古代日本語』、和泉書院、二〇一九年、単著、全二六〇頁

論文

- 1 「上代才列甲・乙母音対立崩壊の一要因―機能負担量の観点から―」『国語学』127、国語学会、一九八二年十二月
- 2 「上代語におけるイ列甲・乙対立の弁別的機能」『国語学研究』21、東北大学文学部「国語学研究」刊行会、一九八一年十二月

- 3 「上代日本語ラ行音考」『富山大学人文学部紀要』6、一九八三年二月
- 4 「古代語<math>\text{ɔ} / \text{o}</math>対立の崩壊過程―特殊仮名遣違例と平安朝文献における<math>\text{ɔ}</math>の仮名の用例から―」『国語学』133、国語学会、一九八三年六月

- 5 「西大寺本金光明最勝王経古点の<math>\text{ɔ}</math>の仮名の用法」『国語学研究』23、東北大学文学部「国語学研究」刊行会、一九八三年十二月

- 6 「<math>\text{ɔ} / \text{o} / \text{ɔ} / \text{o}</math>対立崩壊に際しての有坂・池上法則の歴史的役割と意義」『万葉』122、万葉学会、一九八五年八月
- 7 「仮名の分布より見た<math>\text{ɔ} / \text{o} / \text{ɔ} / \text{o}</math>対立崩壊の諸問題」『富山大学人文学部紀要』11、一九八六年三月

- 8 「単音節語（幹）に生じた特殊仮名遣（才列音）の違例」『京都教育大学国文学会誌』21、一九八六年十一月
- 9 「上代語才列音の変遷に関する学説」『国語国文』57（1）、京都帝国大学国文学会、一九八八年一月

- 10 「有坂秀世「音韻論」の成立の一断面―プラハ学派との関わりから―」『富山大学人文学部紀要』14、一九八九年二月
- 11 「新資料「有坂秀世氏音韻論手簡」をめぐる幾つかの問題について」『文芸研究』124、日本文芸研究会（東北大学）、一九九〇年五月
- 12 「上代語動詞における自他対応形式の史的展開」『国語論究』2、明治書院、一九九〇年六月
- 13 「助動詞「る・らる」「す・さす」成立の歴史的条件について」『国語学』164、国語学会、一九九一年三月
- 14 「古代国語における動詞派生形態の歴史の変遷について」『藤森ことは論集』、清文堂出版、一九九二年
- 15 「古代語動詞内部形式による範疇的意味表示の発達過程」『富山大学人文学部紀要』19、一九九三年三月
- 16 「古代日本語の音節構造の変遷に関する私見」『名古屋大学国語国文学』74、一九九四年七月
- 17 「日本語動詞の古層」『月刊日本語論』2（11）、山本書房、一九九四年十一月
- 18 「史的音韻論の成立」『国語学研究』34、東北大学文学部「国語学研究」刊行会、一九九五年三月
- 19 「古代日本語における形容詞造語法に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』41、一九九五年三月
- 20 「『文書主義』の概念と日本語表記の成立について」『日本語論究』4、和泉書院、一九九五年九月
- 21 「古代の音韻」『概説日本語の歴史』、朝倉書店、一九九五年
- 22 「日本文学における「規範」の問題―学説史的考察―」『名古屋大学文学部研究論集』42、一九九六年三月
- 23 「日本語学史における「音韻」の問題」『名古屋大学文学部研究論集』43、一九九七年三月
- 24 「語彙的なもの」と「文法的なもの」について」『日本語の歴史地理構造』、明治書院、一九九七年七月
- 25 「奈良時代語の尊敬をあらわす語尾スの消長」『日本語論究』5、和泉書院、一九九七年十二月
- 26 「喉音三行弁」と近世仮名遣い論の展開」『国語学』192、国語学会、一九九八年三月
- 27 「『和字正濫鈔』の理論構成―「いろは歌」から「五十音図」へ」『万葉集の世界とその展開』、白帝社、一九九八年

年 「ゆ・らゆ」（「る・らる」への変化を含む）⇨なぜ受身・自発・可能など多義なのか―（ex）「夜を長み眠の寝

- らえぬに」―万葉集』、『国文学…解釈と教材の研究』43（11）、学燈社、一九九八年十月
- 29 「日本語史の可能性と「国語史」』、『国語学』196、国語学会、一九九九年三月
- 30 「完了辞リ・タリと断定辞ナリの成立」、『万葉』170、万葉学大会、一九九九年七月
- 31 「断定辞ナリの成立に関する補論―万葉集と宣命を資料として―」、『日本語論究』6、和泉書院、一九九九年十二月
- 32 「日本語史上の奈良時代」、『日本語学』19（11）、明治書院、二〇〇〇年九月
- 33 「日本語学史における「音声」の発見」、『名古屋大学文学部研究論集』47、二〇〇一年三月
- 34 「古代人のこゑ（声）を聞く」、『美夫君志』63、萬葉研究誌、二〇〇一年十月
- 35 「誌上フォーラム…「国語学」と「日本語学」…この際、日本語学を選択しよう」、『国語学』52（4）、日本語学会、二〇〇一年十一月
- 36 『「呵刈葭」論争における上田秋成の依拠学説―礪波今道『喉音用字考』をめぐって―』、『国語学』209、国語学会、二〇〇二年四月
- 37 「喉音三行弁」論争史…近世仮名遣い論の本質規定(上篇)』、『名古屋大学日本語学研究室過去・現在・未来』、二〇〇二年四月
- 38 「喉音三行弁」論争史―近世仮名遣い論の本質規定(下編)―』、『名古屋大学文学部研究論集』49、二〇〇三年三月
- 39 「奈良時代語におけるニアリからナリへの形態変化と意味変化」、『日本語論究』7、和泉書院、二〇〇三年三月
- 40 「喉音三行弁―近世仮名遣い論の根本概念」、『国文学…解釈と教材の研究』48（4）、二〇〇三年三月
- 41 「東条義門『於乎軽重義』の学説史上の意義について」、『言語科学論集』、名古屋・ことばのつどい編集委員会、二〇〇三年五月
- 42 「五十音図と仮名遣い―日本音声学の成立と展開―」、『統合テキスト科学の構築』、名古屋大学大学院文学研究科

- 43 「奈良時代語の述語状態化標識として成立したり・タリ・ナリ」『国語学』215、国語学会、二〇〇三年十月
- 44 「和歌における総仮名表記の成立」『名古屋大学国語国文学』93、二〇〇三年十二月
- 45 「テキスト生成としての日本語表記と日本語研究」『SITES』1 (2)、名古屋大学大学院文学研究科二世紀COEプログラム論文集、二〇〇三年
- 46 「五十音図の学理の完成…東条義門―『於乎軽重義』巻下の記述―」『SITES』2 (2)、名古屋大学大学院文学研究科二世紀COEプログラム論文集、二〇〇四年
- 47 「史的研究始め」『日本語学』24 (4)、明治書院、二〇〇五年四月
- 48 『字音仮字用格』「おを所属弁」の論構成―「五十音図」テキスト化の最終段階―『訓点語と訓点資料』115、訓点語学会、二〇〇五年九月
- 49 「五十音図上代実在説と神世文学―平田篤胤の論理―」『SITES』3 (2)、名古屋大学大学院文学研究科二世紀COEプログラム論文集、二〇〇六年
- 50 「語構成と造語法」『日本語の語源を学ぶ人のために』、世界思想社、二〇〇六年十二月
- 51 「Naissance de la mise en ecriture de la langue indigene dans l'antiquite japonaise」『歴史・フィクシヨ  
ン・表象』、名古屋大学大学院文学研究科二世紀COEプログラム第八回国際研究集会報告書、二〇〇七年
- 52 「ソシユール『一般言語学講義』と日本語学」『ソシユールとテキストの科学』、名古屋大学大学院文学研究科二  
世紀COEプログラム第九回国際研究集会報告書、二〇〇七年
- 53 「音声・音韻 有坂秀世『上代音韻攷』『国語音韻史の研究』」『日本語学』26 (5)、明治書院、二〇〇七年四月
- 54 「トルベツコイの音韻論と有坂秀世」『国語論究』13、明治書院、二〇〇七年九月
- 55 「動作の結果継続を表す名詞修飾の歴史的動態」『名古屋大学国語国文学』100、二〇〇七年十月
- 56 「山田文法における「統覚作用」の概念の由来について」『国学院雑誌』108 (11)、二〇〇七年十一月
- 57 「日本語研究の近代化過程と西洋哲学」『HERSETEC』1 (2)、名古屋大学大学院文学研究科二世紀COEプ  
ログラム、二〇〇七年

- 58 「本居宣長」字音仮字用格』成立の背景』『鈴屋学会報』25、二〇〇八年十二月
- 59 『源氏物語』における過去分詞的名詞修飾の1典型』『HERSETEC』2(2)、名古屋大学大学院文学研究科1  
 一世紀COEプログラム、二〇〇八年
- 60 「時枝誠記」言語過程説」と有坂秀世「音韻論」をつなぐ現象学の系譜』『日本語学最前線』、和泉書院、二〇一〇年
- 61 「日本語ヴォイスの歴史的成立と展開について』『日本語テキストの歴史的軌跡』、名古屋大学大学院文学研究科、二〇一〇年
- 62 「Japanese Traditional Language Study and Modernization of Japanese Linguistics.」"Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics" VI. Edited by Hiroki Maezawa and Azusa Yokogoshi, MIT Working Papers in Linguistics Volume 61、二〇一〇年
- 63 「近代日本語研究における教養主義の系譜』『山田文法の現代的意義』、ひつじ書房、二〇一〇年
- 64 「学史と学説史：序論に代えて』『ことばに向かう日本の学知：名古屋大学グローバルCOEプログラム』、ひつじ書房、二〇一一年
- 65 「専門知「国語学」の創業：橋本進吉の音韻史』『ことばに向かう日本の学知：名古屋大学グローバルCOEプログラム』、ひつじ書房、二〇一一年
- 66 「本居宣長のテニヲハ学』『テキストの解釈学』、水声社、二〇一二年
- 67 「奈良平安朝文芸における過去辞が介入する分詞用法』『名古屋言語研究会』6、名古屋言語研究会、二〇一二年三月
- 68 「本居派古典語学の近代的性格について』『国語と国文学』89(12)、明治書院、二〇一二年十二月
- 69 「形態的特徴から見た古代日本語動詞の増殖課程』『国語国文』82(5)、京都大学文学部国語学国文学研究室、二〇一三年五月
- 70 「上代語活用助辞と動詞語尾との歴史的関係について』『国語国文』83(12)、京都大学文学部国語学国文学研究



室、二〇一四年十二月

71 「上代語動詞の形容詞転用に関する諸問題」『国語語彙史の研究』34、和泉書院、二〇一五年三月

72 「古代日本語動詞の歴史的動向から推測される先史日本語」『日本語の起源と古代日本語』、京都大学文学研究科、二〇一五年

73 「上代語活用助辞ムの意味配置に関する統語構造」『万葉』221、万葉学会、二〇一六年三月

74 「上代語意志・推量の助辞ムの成立と展開」『訓点語と訓点資料』136、訓点語学会、二〇一六年三月

75 「二〇世紀日本語研究」と記号の恣意性」『21世紀のソシユール』、水声社、二〇一八年

76 「奈良時代語における話者願望マクホシをめぐる通時的諸相」『国語語彙史の研究』37、和泉書院、二〇一八年

#### 共編者

1 『名古屋大学日本語学研究室 過去・現在・未来』、二〇〇二年四月、共編著者…田島毓堂、全二九二頁

2 『ことばに向かう日本の学知…名古屋大学グローバルCOEプログラム』、ひつじ書房、二〇一一年、共編者…宮地朝子、全三三六頁

#### 書評

1 「有坂愛彦・慶谷寿彦編『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』」『国語学』160、国語学会、一九九〇年三月

2 「和田明美著『古代の象徴表現の研究—古代的自然把握と序詞の機能—』」『名古屋大学国語国文学』80、一九九七年七月

3 「佐佐木隆著『上代語の構文と表記』」『国語学』194、国語学会、一九九八年九月

4 「山東功著『明治前期日本文典の研究』」『国語学』214、国語学会、二〇〇三年七月

5 「乾善彦著『漢字による日本語書記の史的研究』」『万葉』187、万葉学会、二〇〇四年五月

学界展望

- 1 「国語学 古代（文字・音韻）」『文学・語学』132、全国大学国語国文学会、一九九一年十二月
- 2 「音韻（史的研究）」『国語学』117、国語学会、一九九四年六月
- 3 「国語学 古代（音韻・文字・表記）」『文学・語学』153、全国大学国語国文学会、一九九六年十二月
- 4 「研究史」『国語学』218、国語学会、二〇〇四年七月
- 5 「総説」『日本語の研究』14（3）、日本語学会、二〇一八年八月

辞書項目

- 1 『日本語学研究事典』項目執筆「母音」「上代の音韻」「日本語学研究史」「呵刈葭」「音韻史」、明治書院、二〇〇七年
- 2 『漢字キーワード事典』項目執筆「有坂秀世」「石塚龍麿」「音義説」、朝倉書店、二〇〇九年
- 3 『日本語大事典』項目執筆「延約通略」「於乎軽重義」「音韻相通」「音義」「音義全書」「冠辞考」「黒川春村」「喉音用字考」「国語史学基礎論」「語頭」「字音仮字用格」「通略延約弁」「男信」「日本語学史」「日本釈名」「被覆形」、朝倉書店、二〇一四年
- 4 日本語学会編『日本語学大辞典』項目執筆「韻学（音韻学）」「音韻相通」「喉音用字考」「字音仮字用格」「呵刈葭」「音韻論（書名）」「語形」「古言衣延弁」「てにをは」「日本語学史」「本居宣長」「本居春庭」、東京堂出版、二〇一八年